

寝屋川市立田井小学校における取り組み 2008年度

1. 活動の概要

寝屋川市立田井小学校と京都大学大学院教育学研究科との共同研究は、同小学校が文部科学省委嘱学力向上拠点形成事業として算数科の研究を開始する2005年度から始まった。2007年度までは、京都大学の教育認知心理学講座と教育方法学講座の教員・院生による共同グループを中心に取り組みが行われた。院生は、研究授業と事後の研究協議会への参加に加えて、算数の授業設計から参加し、先行事例や教材の提案、そして評価課題の開発なども行った。そしてこうした取り組みの成果は赤井悟監修・大阪府寝屋川市立田井小学校研修委員会編著『高い学力を育む授業研究』（三学出版、2008年10月）としてまとまっている。

今年度は、田井小学校の研究が新たに国語科に焦点を当てた体制となったことを受け、京都大学においても、国語科あるいは「読解力」の育成に関心を持つ教育方法学講座・教育認知心理学講座の教員・院生が中心となって共同グループを編成した。昨年度までの共同研究体制を踏まえつつ、国語科および「読解力」の育成について、研究授業を軸に共同研究を進めた。



▶授業の様子

2. 活動状況

今年度は、各学年の研究授業を軸として、当日の研究授業および事後の研究協議会への参加に加え、先行事例の紹介・教材の提案を行った（表1参照）。

国語科の共同研究を進めるにあたっては、これまで

表1. 活動一覧

年 月	日	活 動	内 容
2008年6月	3日	打ち合わせ（於：京大）	研究協力依頼、研究方針について話し合い。
	18日	研究授業（第6学年「川とノリオ」）	教員、大学院生による先行事例や教材の事前提案、および、当日の研究授業参観、事後検討会への出席（院生、助教）。
	24日	田井研究会第1回	京大メンバーの顔合わせ、研究内容、方針の確認。
	26日	研究授業（第3学年「自然のかくし絵」）	教員、大学院生による先行事例や教材の事前提案、および、当日の研究授業参観、事後検討会への出席（院生、助教）。
7月	15日	田井研究会第2回	研究授業（第1回）のふりかえり、およびPISA型読解力についてと授業研究についての検討会。
8月	20日	事前検討会	院生・学部生による、第3回田井研究会に向けた事前検討会。
	26日	田井研究会第3回	「ごんぎつね」の研究授業をめぐる各民間研の立場について検討会。
	29日	田井小学校にて講演会(1)	学部生・院生を中心に「ごんぎつね」をめぐる各民間研の立場について発表。
10月	8日	田井小学校にて講演会(2)	学部生・院生を中心に「ごんぎつね」をめぐる各民間研の立場、およびPISA型読解力について発表。
11月	7日	研究授業（第2学年「アレクサンダーとぜんまいねずみ」）	教員、大学院生による先行事例や教材の事前提案、および、当日の研究授業参観、事後検討会への出席（院生、助教）。
	13日	田井研究会第4回	10、11月の研究授業および講演会のふりかえり
	27日	研究授業（第5学年「マンガの表現を楽しむ」）	教員、大学院生による先行事例や教材の事前提案、および、当日の研究授業参観、事後検討会への出席（院生、助教）。
12月	3日	研究授業（第4学年「ごんぎつね」）	大学院科目「教育方法研究」と合同で参加。田中、西岡、赤沢、八田（福井大学講師）、大学院生9名。当日の研究授業参観、事後検討会への出席。
	10日	研究授業のふりかえり	大学院科目「教育方法研究」の時間内での開催。
2009年1月	30日	研究授業（第1学年「たぬきの糸車」）	当日の研究授業参観、事後検討会への出席（院生、助教）
3月	3日	田井研究会第5回	今年度のふりかえり、1月の研究授業のふりかえり

の国語科研究の歴史において各民間研究団体の研究蓄積を学ぶことが重要であるということが認識された（例えば、文芸教育研究協議会、科学的「読み」の授業研究会、児童言語研究会、日本作文の会など）。そこで今年度の研究は、各民間研究団体の研究蓄積を学びあうこと、そしてそこで得た知見を研究授業に活かしていくことの2点が大きな柱となって進められた。

第一の柱として、各民間研究団体の位置づけやこれまでの研究蓄積、および現在のPISA型読解力や文部科学省のすすめる読解力育成の方針について、京都大学の大学院生から田井小学校の教員を対象に2回にわたって発表を行った。なお、この際には、具体的な単元を4年生の研究授業で扱う予定となっていた「ごんぎつね」に焦点化し、各民間研の主張が具体的に授業場面にどう結びつくかという視点から発表を行った。そして、そうした主張や具体的な手立ての有効性について、田井小学校の子どもたちに即した検討が行われ、田井小学校が国語科、あるいは学校全体で取り組んでいく方針について議論された。

第二の柱については、まず京都大学の共同研究メンバーから、研究授業で扱う単元の先行事例や教材の提案の際には、同一の単元をめぐる各民間研究団体それぞれの実践例や資料を提示した。とりわけ、上記の「ごんぎつね」の研究授業においては、授業で扱う予定の場面について各民間研究団体の授業記録を提供し、参考にいただいた。また、京大側では、事前に頂いた指導案にもとづいて、授業の流れや発問について検討する機会を持った。

12月3日に行われた4年生の研究授業（単元：「ごんぎつね」第5場面、授業者：田鹿大輔教諭）には、教育学研究科の田中耕治教授、西岡加名恵教授、赤沢真世助教、大学院生9名に加え、国語科の研究蓄積に詳しい福井大学の八田幸恵講師も参加した。

研究授業では、一人一人の学びの様子を丁寧に捉えたいという授業者の意図のもと、各学年の先生方がそれぞれのグループの子どもの学びの様子を観察していった。また、参観者の手元には、授業者が事前に作成した子どものこれまでの学びの様子を記入した「座席表」が配布された。こうした授業研究の方法は田井小学校において初めての試みであったが、その授業での発言や態度とこれまでの学びを照らし合わせることで、個々の子どもの学びの質の深まりや発展、あるいはつまずきを見出すことが可能になった。



▶ 友達の発表に熱心に耳を傾ける子どもたち



▶ 研究協議会に参加する院生の様子



▶ 研究協議会での授業者のふりかえり

そのため、事後の研究協議会では、具体的な子どもの姿に基づいた議論を行うことができた。また、子どもの具体的な発言と各民間研の主張や実践を結びつけた議論も行われ、それまでは具体性を帯びにくかった民間研の主張や方針も、子どもたちの具体的な発言や学びの姿と重ねることができた。この一連の授業研究は、各民間研の各主張を批判的にとらえ、田井小学校の子どもたちにとって必要な国語の力とは何か、読解力とは何か、という研究方針を形作る上で、大きな意味を持つ機会となったといえる。

3. 活動の成果と課題

今年度は、国語科を中心とした共同研究の1年目として、これまでの各民間研究団体の知見を比較検討し、議論する機会を持った。このような取り組みを通して、田井小学校の子どもたちの実態に即した国語科あるいは学校全体の方針が形作られてきた。また、授業研究の方法論についても、子どもの学びを丁寧に捉える必要性を改めて認識できたと思われる。

しかしながら、今年度は研究授業当日への参加、および事前の先行事例の提供が主な活動であった。今後は、研究授業のみでなく、そこに至るまでの、あるいはその授業後にさらに変容していく子どもたちの具体的な学びの過程をとらえることが必要である。そのため、研究授業前後の授業観察や、事前・事後の学習過程をとらえるための教材や評価課題の開発においても共同的な研究をすすめていきたい。

（文責：赤沢 真世）